

ハイデッガー『存在と時間』における「時間性」について

丸山文隆(東京大学)

マルティン・ハイデッガーの『存在と時間』について、次のような説明がなされたならば、おそらくほとんどの論者から同意が得られるであろう。それはすなわち、この著作の全体は「存在一般の意味は時間である」という仮説に導かれており、公刊されなかった第一部第三篇「時間と存在」においてこの仮説が提示・検討されるはずであったのだが、実際は第一部第二篇「現存在と時間性」において、「現存在の存在の意味は時間性(Zeitlichkeit)である」という準備的テーゼが提示・正当化されたに過ぎなかった、というものである。

しかしながら、そうした意味では『存在と時間』公刊部の最高到達点であるその時間論は、いまだ十分に議論されていないのではないだろうか。本発表は、『存在と時間』公刊部の時間論を解釈する際の最大の課題である、「時間性」概念の解明を行う。この概念の解明のため、われわれがぜひとも仮説を提示し、検討すべきであるのは、時間性がそれであると言われる三つの「脱自態」とはそれぞれ何であり、またこれらにそれぞれ属すと語られる「地平的図式」とはどのようなものであるのか、ということである。

本発表は、Käufer(2013)の提案を受け、『存在と時間』第一部第二篇第三章「現存在の本来的な全体存在可能と気遣いの存在論的意味としての時間性」の議論が、時間論である以前に自己論である、と理解する。すなわち本章の論述においてハイデッガーが「時間性」についてもっとも詳しく語るのは第三章第 65 節「気遣いの存在論的意味としての時間性」においてであるが、この議論は第 64 節「気遣いと自己性」の継続であると理解すべきである。第 64 節は、カント『純粹理性批判』の超越論的誤謬推理における「われ思う」の議論を批判し、ここにおいてカントが自己の存在の同一性を、〈事物が自己と同一であること〉と同様のものとして見出そうとしていると主張する。ハイデッガーが言いたいのは、そうではなく、自己の同一性は事物の同一性とは異なった種類のものなのだとすることである。第 64 節は自己の同一性に「自己自立性 Selbstständigkeit」という名称を与えるだけで、これがどのようなものなのかを説明しない。われわれは、第 65 節の議論を、この自己自立性のさらなる説明であると理解する。すると、時間性がそれである三つの脱自態とは、まずは〈わたしがわたし自身であることを可能にする三つの運動〉であることになる。

第三章における、三つの「脱自態」をめぐる晦渋な記述を読み解くためにわれわれが検討すべき解釈仮説は、「到来は可能性を、既在性は存在を、現在者は存在者を、それぞれ顕わにするような何らかの現象である」というものである(丸山 2016)。すなわち、これらの現象は「現存在が自己の存在を了解すること」として知られているひと続きのことがらを可能にするような、〈存在可能性、存在、存在者の三者のあいだの交通ないし軌道〉として理解することができる。

この仮説は、「時間」という——そして未来、過去、未来という——名称でわれわれが日常的に意味していることの内容からすれば俄かには信じがたいものであるが、われわれはハイデッガーが「時間性」という概念を日常的時間概念と鋭く切り離していたことを忘れてはならない。ハイデッガーにしたがうなら、時間を時

間性から理解すべきなのであって、その逆ではない。

本発表は、さきの仮説によって理解された「脱自態」からして、「われわれが未来、過去、現在という名称で理解するもの」を説明するための道筋を提示することを最大の目標とする。

この課題のためにわれわれが出発点とするべきハイデッガーの主張は次のようなものである。「事実的な現＝存在とともに、それぞれ到来の地平においては、その都度或る存在可能が企投されており、既在性の地平においては『既に存在する』が開示されており、そして現在の地平においては〈配慮されるもの〉が発見されている。」(SuZ, 365.)

これら三つの地平的図式の統一は、現存在の存在をあらかじめ描き出す(ebd.)、とも主張されている。われわれの見るところでは、脱自態の「地平的図式」とは、現存在が特に世界内存在として、すなわちその存在が同時にすべての存在者の存在を内包しているものとして見られた際の、その存在を描き出すような規定である。そう考えるならば、三つの脱自態は、それぞれ現存在の存在可能性、現存在の存在、現存在等の存在者の三者が、顕わになるような現象の規定であることになる。

われわれは事象に目を向けつつ、到来、既在性、現在のそれぞれの地平的図式にどういった内容が含まれるべきであるかを明らかにする。

到来においては、世界内存在としての現存在のすべての——東京オリンピックの開催や日本ウナギの絶滅といった——可能性が、おのれの死の可能性に縁どられつつ現われることになる。既在性においては、世界内存在としての現存在の存在の全体が——いまここにこのような所持品や他者との関係とともにわたしがいるということが——顕わになる。そして現在において、わたしに対して——重力波や明日の天気予報、「二等辺三角形一般」といった——さまざまな存在者が出会われることになる。

これら三方向の開示は、われわれが「未来、過去、現在」と呼ぶものとただちに対応しない。しかし、われわれは、むしろこれら三脱自態から出発して、「われわれが未来、過去、現在と呼んでいるもの」を説明できないかどうかを見てみなくてはならない。このように考えるならば、到来とは、〈わたしがそれを避けたり望んだりしうること〉が、既在性とは〈わたしがそれを引き受けざるをえないこと〉が、現在とは〈わたしの認識や実践の対象〉が、それぞれ顕わになることであると考えられるのであって、これらの区別が、総じて「未来の存在者」、「過去の存在者」、「現在の存在者」の三者をわれわれが区別して理解する際の基準として機能しているのではないか、という時間論の方針が読み取られることになる。

※参考資料

SuZ = Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 18. Auflage. Max Niemeyer Verlag, 2001.

Käufer, Stephan 2013: "Temporality as the Ontological Sense of Care", in *The Cambridge Companion to Heidegger's Being and Time*, edited by Mark A. Wrathall, Cambridge University Press, pp. 338-359.

丸山文隆(2016):「ハイデッガー『存在と時間』における『地平的図式』について」、日本現象学会大会第38回研究大会口頭発表(2016年11月26日)